

STAGE+を楽しむ(167)(HP 収載)

—ルービンシュタインのショパン、グリーグ、サン=サーンス—

1. 始めに

前報(166)に引き続き、STAGE+のルービンシュタインのショパン、グリーグ、サン=サーンスの演奏の試聴を実施します。

2. 試聴音源

今回はルービンシュタインのショパン、グリーグ、サン=サーンスの演奏を選びました。

ショパン、グリーグ、サン=サーンス：アルトゥール・ルービンシュタイン・イン・ロンドン

プレヴィン&ロンドン響

収録日：1975年4月24日

アルトゥール・ルービンシュタインの最晩年の映像です。ここでは、ショパンとサン=サーンスのピアノ協奏曲第2番、グリーグのピアノ協奏曲をアンドレ・プレヴィンとの共演で演奏しています。オーケストラは、ロンドン交響楽団。88歳の巨匠は、闊達として流麗、そして気品に溢れたスタイルを示し、心から驚嘆させられます。彼の演奏が、このような形で残されていることに、深く感謝せずにはられません。

ソリスト：

アルトゥール・ルービンシュタイン（ピアノ）

演奏：

ロンドン交響楽団

指揮：

アンドレ・プレヴィン

曲目：

フレデリック・ショパン ピアノ協奏曲第2番へ短調 op. 21

エドヴァルド・グリーグ ピアノ協奏曲イ短調 op. 16

カミーユ・サン=サーンス ピアノ協奏曲第2番ト短調 op. 22



3. 試聴の経過

前回に引き続き、これまでに実施してきた対策に加えて、アースアキュライザーの活用(6)で報告しましたようにアースの再構成を実施し、AV ドーナッツも使用しています。

ショパンのピアノ協奏曲第2番は、まだ若いプレヴィンとともに1975年の収録とは思えないほどの音質で、ルービンシュタインらしい詩的な情緒を湛えたフレージングで美しい旋律を奏でていきます。

グリーグのピアノ協奏曲は、ショパンとはうってかわって、北欧のメランコリックなロマンスムを余すところなく表現されています。

サン=サーンスのピアノ協奏曲第2番は、初めて聴く曲ですが、色彩感あふれる鮮やかなルービンシュタインの演奏です。



4. まとめ

これまでに実施してきた対策に加えて、アースアキュライザーの活用(6)で報告しましたようにアースの再構成を実施し、AV ドーナッツも使用した結果、ルービンシュ

タインが、ショパン、グリーグ、サン＝サーンスと表情の異なる曲を的確に描き分けていることが分かりました。

以上